

最新更新分へジャンプ

「雨の方は大丈夫みたいなんで。ええ……はいはい。じゃ、その通りに」

一晩明けるうちに、雨はすっかり上がっていた。

いつもの黒い空を背にして、いつもの調子で電話を終えたムロビシは、いつもの書齋にひとりきり。くたびれたソファから起き上がったのは、さして前の時間ではない。コンピュータの人工光が、暗がりの世界に馴染んだ目に痛々しく飛び込んでくるのが煩わしく、視線を逸らすように心がけながら受話器を戻す。

腕を頭上へ上げ、体を伸ばす。肘や肩、背中といった、ありとあらゆる関節が情けなく乾いた音を立てて鳴る。体が痛い。そろそろあの質の悪いソファで眠るのは堪らない……そう考えるようになってから、もう一年近く経つのではないだろうか。

買い換える金はない。増え続ける廃墟から拾ったとしても、存分に体を伸ばして眠れるような大きさの家具を運ぶ手段もなく、泣く泣く現状を維持するしかない。

床にマット材を敷き詰めて眠る方法も試そうとした。地道に寄せ集めれば容易に叶いそうだと思つた。それも実行に至らなかつた原因は、偏ひとえに雨毒うそくにある。

雨毒は降り注いで数秒で透明度を取り戻し、ただの雨水へと変化するが、毒性が完全に失われるわけではなく、ごく微量な効果を持ったまま乾燥した物質が沈殿、蓄積すると推測されている。それを知つていながら毎晩地べたで眠れるほど、ムロビシは人生を諦められていなかった。文句は絶えないが、こればかりは長い物に巻かれる以外ない。

不毛な回想に耽る怠惰と共にストレッチを終え、机上に置かれた細身の白いリボンを静かに持ち上げる。回転式の椅子を半周くると動かし、窓の外に広がる恒常と化した悪天を背景に、リボンの片端を摘んだまま、もう片側を離す。

縦一本に垂れるそれは、さながら、ヨサメを模しているようである。

昨日、雨毒の降る中、なんとか無事に帰宅した後、朝のうち話していた通り、保留していた恒例の簡易検査を行った。最後に血液採取を終え、注射創を押さえるキナリから受け取ったのが、この白いリボンであった。

『ロツトラントで買った。ムロビシにあげる』

『何に使う物だろう?』

『……髪に』

『へえ——ありがとう。上手く結べるかなあ』

ムロビシにとって、キナリのその行動は予想外だった。そのあとすぐにカラスの元へ寄つて、赤いヘアピンで前髪を留めてやっているのを見るに、どうやら彼にもプレゼントを買つて渡してあげたらしい。カラス本人は面倒くさそうに嫌がつているが、なるほど、やはりキナリは心優しい子だと感心する。

(俺は不器用だから……)

宙に垂らして眺めていたリボンを、無骨な大きな手で掴み直し、後ろ手に回して、すでに髪

を結っているヘアゴムの上から、白いリボンで蝶々結びを描く。このリボンだけで髪を結うには手間と慣れが必要だが、せっかくもらった心遣いなのだし、せめてこうして飾りとして使つてやるべきだろうと思った。

「さて——行きますか」

上手く結わけているのか、自分で確認できるような洒落た道具はないが、どうせ誰が注視するようなものでもない。取り分け気にかけることもなく、事前に用意してあつたくたびれた鞆を小脇に抱えて書齋を出る。底冷えする廊下を左——カラスとキナリのいる、星霜デイトナフル匣が置かれた部屋の方を向くと、アカアリが所定の位置にぼうつと立って、窓ガラスから外を眺めていた。

足も腕も痛々しい皮下出血の痕が残っているが、ひとまず自力で歩行することはできるらしい。至る箇所が破けてしまった服はあまりにも不埒で、さすがにどこかで買い直してやるべきかと唸りながら、廊下を進む。

すれ違いざま、アカアリの首元にたつぷり設けられたファーに、見慣れない物体が付着しているのに気づく。

青いブローチ。幾何学的なデザインで、それなりにしつかりとしたつくりのようだ。これも恐らくキナリが買い与えた物だろう。どこで何をするか予測しづらいアカアリでも引つ張つたりして落としづらそうな位置を選択して、宥めながらつけてやったのだと思えば、随分な成長

である。普段アカアリの様子を観察しているキナリならではの結論で、直情的なカラスには到底真似できまい。

ムロビシの考察の間も、アカアリは眼球すら動かすことなく、窓の外を静観している。そこから見えるものと言えば、雨毒により豊かさを失った荒野と、その先に聳えるヨサメくらいなものだろう。

「お前もヨサメがお気に入りか」

アカアリが本当は何を見ているのか分かったものではないが、そう声をかける。もちろん、返答はない。

「しかし……前々から疑問だったんだが、そのピアスと髪留め、自分で拾ってきたのか？」

「……………」

「拾うだけならまだしも——そんなわけないよな」

独りでに続く問いかけに、さすがのアカアリも脇目にムロビシを見る。ムロビシはヨサメを視線に捕らえながら、右手で数回、頭を搔いて呟く。

「性が悪い輩だね」

5 3章 文字
うつすらと嘲笑を浮かべ、再び年少少女の元へと歩み出す。その姿を追うようにアカアリは首を回すが、すぐに何事もなかったように窓ガラスへと視線を戻し、じつと眺望へと意識を戻した。

アカアリの所在から数歩進んだところで、厚い掌を丸め、壁をノックする。

「おふたり。起きてるかな？」

返事を待たずして部屋を覗き込むと、相変わらず勉強に勤しむキナリと、何をすることもなく仰向けに寝転がるカラスの姿があった。

「……ヒマ」

カラスがぼそりと呟く。

「昼寝でもできりやいいのにね」

ムロビシは笑って言うと、カラスは片足を上げて、その親指で星霜匣を指し示す。

「ちよつと前に、その汁から出てきたばっかだつつの」

「汁って。水とか液体くらい言いなさい」

「一緒だろが。そもそも、その『寝る』って感覚が分かんねーわ」

「ううん。方法を覚えるような現象じゃないだけに、説明がしづらいね」

入口近くに置かれた、星霜匣の維持装置のひとつに腰掛ける。

「それこそおいちゃん、廻ねど人が睡眠を欲さないっていうのも、君らの生活ぶりで初めて知ったくらいだし」

「ふーん。もつかい星霜匣潜つとくかな……。アカアリ、怪我してつから、いつもみたいに寄つてこねーんだよ」

「へえ……」

アカアリが手負いのうちに殴りかかって勝とうとは思わないのか、とムロビシは密かに思う。「アカアリは眠ることはしても、『痛み』はないらしい。カラスくんとやり合うのを避けてるんだとしたら、痛いからじゃなく、動きづらいからだとは思うけど」

「んなのはどっちでもいいわ。とにかく、ヒマ！」

当てつけのように言い捨てて、床をごろごろ。その床も冷たいだろうに……と哀れむムロビシは、カラスの前髪が赤いヘアピンでちゃっかり留められていることに気づき、噴き出しそうになるのを堪える。文句を言いながらも嬉しかったのか、はたまた前髪が視界に入るのが邪魔で仕方がなかったのか。理由はどうであれ、彼が存外素直にプレゼントに応じることも、ムロビシにとっては意外であった。

「ほら、これからイベントがあるから元気出なって。昨日話したとおり、早速推進派の連中が来ることになった」

ほんの一瞬、キナリの字を書く手が止まる。

「結構前に出発したって連絡は来てるから、もう少ししたら着くと思う。で、やつらが到着次第、おいちゃんはお話のしに掛けることになってる」

「そいつら相手に何すりゃいいんだよ」

「何するって……君らの健康診断のために来るって話したよね？ いきなり殴りかかったりし

ないですよ？」

「約束できねーわ。体鈍ってるし」

「やれやれ、困った子ばっかりだな……」

落胆するムロビシのぼやきを聞いて、キナリは自分も面倒くさがられていろいろしいことを知りムツとするが、どこからか聞き慣れない爆音が鳴り響いてきたことで、そんな不満は瞬間にかき消された。ムロビシが立ち上がり、「クラクシオンだ」と教えてくれる。

「良かったね、カラスくん。早々に暇が潰せそうぞ」

噂の来客のようだ。カラスはガレージの方面へ向かうムロビシを見ると、先程までのだらけた態度は嘘だったかのように軽やかに起きあがり、ポケットに手を突っ込んだまま後についていく。キナリも、ゆつたりと深呼吸してから席を立つ。アカアリはそんな三人の姿を見送るだけに留まり、その場から動くことはしなかった。

ガレージに出、一旦車内に潜ったムロビシが、シャッターを遠隔操作で開ける。低音を轟かせて内側が開ききつてから数秒明けて外側も開き始める。一枚だけでは雨毒の進入を防げないと、ロットラントへ行く前にムロビシが説明していたなあと、キナリは遠い昔のように思い出す。

二重構造のシャッターの先、見たこともないような大きな車が姿を現した。巨大なヘッドライトがコテージを煌々と照らす。外側のシャッターが完全に開ききつた頃合いを見計らって、

運転席からひよろつと細長い男が降りてきて、朗らかな表情で会釈をした。

身長はムロビシよりもう一段大きいようだが、かなりの瘦身のため、嵩に掛かる印象はない。その華奢さはキナリにも負けず劣らずといった具合で、着ている服が身丈の割に余って見えるのもそのせいだろう。

灰色の髪は、毛質の柔らかさが見て取れるほど重力に逆らうように立っており、その裾だけがほかより少し長い。実に手触りが良さそうな豊かさだ。切れ長の目に埋まる瞳の色は深い朱。反して、身にまとっている服は上下ともに臙脂色で揃えており、それらを半分ほど隠すような白衣に袖を通してある。ムロビシとは随分と異なる衣服に、早速キナリの好奇心が向く。

「お久しぶりです、ムロビシさん」

ひ弱そうな外見に似つかわれない、たつぷりとした低い声で投げられた男の挨拶に、ムロビシは親しげに返す。

「どうも。しばらく振りだけど、トイトくん、また寔やっれた？」

「かも知れないですね……。連日連夜、地獄を間近に眺めてますんで」

トイトと呼ばれた長身の男は、萎れそうな空笑いを立ててムロビシの前まで歩み寄るのだが、その歩調はどこことなくおかしい。カラスとキナリでもすぐに気づくほどの違和感を、透かさずムロビシが問いかける。

「足でも痛めたんかい」

「ははは……。疲労骨折だそうです。治りかけですけどね」

「君の担当、そんな重労働だっけ？」

「いえいえ。日照不良、栄養失調、睡眠障害……諸々のヤツです。軽傷なのに全治五ヶ月だつて。困っちゃいます」

世間話と共に、軽く握手を交わす。

「つくづく雨には参るね。それにしても、その足で運転してきたわけ？」

「ええ。ラヤンに任せるには、僕の肝っ玉が及ばないもので」

「ああ……賢明だ」

カラスは二人の会話を部分部分聞き取りつつも、あまり意味のある内容ではない気がして、呆れたように溜息をつく。まだしばらく無為な時間は続きそうだ。ガレージの一角に積まれた車のスペアタイヤに腰掛ける。一方のキナリは、トイトの挙動を舐め回すように観察していた。一切を見逃してなるものかという気概が瞳に宿っている。

トイトの肩越しに車をちらりと覗いて、ムロビシが続ける。

「そのお抱え問題児の様子はどうだい」

「こんなに待っても降りて来ないところを見てもらえば分かる通り、相変わらず。もう一度躡け直していただいては？」

「勘弁してくれ」

からかうようなトイトの一言に、ムロビシは珍しく心底渋い表情を浮かべ、首を左右に小さく振る。そんなムロビシの困惑を大層満足げに眺めたトイトは、後ろに停めた車を振り返り、助手席に向けて手を招いた。男二人の話から察するところ、まだ車内に誰か居るようだが、ヘツドライトが邪魔をして全く姿を捉えられない。

妙な間が場に流れてから数秒経つと、根負けしたのか、小さな人影が大型車の助手席から身軽に降りてきた。爪先立ちで覗き込んでいたカラスの目にも、ようやく全貌が映り込む。キナリも追って確認する。

人影の正体は、女と思しき人間。トイトと呼ばれた男と同様の白衣を身につけているが、そのほかの奇抜な容姿には、普段口の滑るカラスが言葉を失うほどであった。

目にも鮮やかな明るい青い髪は、前髪だけが短く刈られ、長い両鬢りょうびんの先端だけ結ばれている。吊り上がった赤目と、首元に巻かれた薄手の布の隙間から見え隠れする、黒い絵のような模様が放つ威圧感たるや凄まじい。腹と腿を露出するような服も目を引くが、胸部の起伏は少なく、性別の判断を迷う一因を担っている。

「ほら、挨拶」

トイトに促され、悪魔のような風貌の女は、僅かに会釈をして、口を開く。

「……お久しぶりです」

非常に聞き取りづらい小さな声。決して弱々しいわけではなく、わざと吃どもっているかのよう。

大仰に肩を竦めるトイトに唆され、ムロビシが仕方なしに女へ声をかける。

「——普段の暴悪っぷり、俺にも人伝に届いてるぞ」

「光栄です。感化されたまま抜けやしませんので」

先程の囁きのような喋りとは打って変わって、女が他に物言わせぬ早口でまくし立てる。どうやら二人は知り合いであるらしいが、親しいわけではないのか、互いが売り言葉に買い言葉だと、キナリはそつと思う。

ムロビシは調子を乱すこともせず、淡々と続ける。

「そろそろ相手を選んで慎む手段も覚えた方がいんじゃないか」

「どの口が言いますか。お互い様でしょう。本部じゃあなたもいろいろ言われてますよ」

「なるほど……光栄だね」

頗るすこぶ機嫌を損ねた女に、ムロビシはそれ以上の言葉をかけることは諦め、わざとらしくトイトを真似て肩を竦めてみせる。

「こんなもんでいいかい」

やはり満足そうなトイトが綻ぶ。

「お手あげですね」

懐かしい面々との挨拶が終わったのか、ムロビシがカラスとキナリを振り返る。カラスの顔面には、あまりにも回りくどく分かりづらい三人のやり取りから置き去りにされた不満が浮き

彫りになっているが、それを弄ぶ気分ではないのか、ムロビシから簡潔な紹介がなされる。

「この二人が、例の推進派の一員だ。小さい方がラヤン。大きい方が——」

「トイトです。よろしく」

カラスの内心を悟ったのか、トイトは紹介を食い気味に遮り、手を差し出す。握手を求め動作だ。先のムロビシとトイトのやり取りを思い返しながら、その手を素直に握り返すべきか否かを悩むカラスの脳裏に、突如、奇怪な光景が閃光のように瞬いた。

目の眩むような明るい空間。眼前に迫る大きな掌。そこに張りつくのは、無数に蠢く小さな物体——。

「——触んなッ!!」

引き攣り声を上げ、トイトの掌を平手で弾く。いつになく突飛なカラスの行動に驚き強ばるキナリ。咄嗟に身構えるラヤン。ムロビシは……座視に留まる。

目を白黒させるトイトへと意識が向き直ると、カラスはハツとして歯を食い縛る。

今見た光景は、一体——。

言い表すことのできない物恐ろしさを孕む、記憶にない場景だった。脈絡のない幻覚の明滅に狼狽え、間近に体が反射してしまったことだけは弁える。

「悪いね、トイトくん」

自身に何が起こったのか、思考の整理に忙しいカラスよりも先に一声上げたのは、最も騒ぎ

に関与しないでいたムロビシだった。

「その子、特別小心者なんだ」

日頃のカラスが聞けば逆上するような物言いだが、それが緊迫した空気を些か解す巧言を担った。

「……うっせー」

ともかく、カラスがいつもの調子で悪態をつくだけで場の混乱はある程度収まった。トイトも平手打ちを食らった手をさすりながら、納得したように「なるほど、なるほど」と呟く。

「驚かせてしまったみたいで、申し訳ない」

「……」

「今日は二人にいくつか問診を……いや、失礼。そうだな、もっと端的に言う……今後の二人の待遇を決めるためにも、事前に聞いておきたいことがあるんです。協力してもらえると非常にありがたいんですけど、どうでしょう？」

言葉を選びすぎりながら説明して、改めてトイトが握手を求める。すぐに応えようとしないうカラスと、やや離れて様子を見守るキナリを交互に向くようにして、どちらかが口を開くのを待つトイト。その喧しい動きをじっと眺めてから、ようやくカラスの口から一言が放たれた。

「イヤだつったって、どうせ帰らねーんだろ」

「……おや」

捨て鉢な物言いを受けたトイトは、途端に感情を削ぎ落とす、ムロビシを振り向き一瞥する。ラヤンも黙ったままだが、同じようにムロビシに向けて睨みを利かす。二人の焦点に合ったムロビシは、ゆっくりと息を吐く。

「……悪いけど、不躰な部分はフォロー願うよ。俺一人じゃ手の回らないことも多いんでね」
何かを察した様子の子のトイトは、特に言及することもなく頷いた。カラスとキナリにはさっぱり分からないやりとりが、どうやら双方の間で完結したらしい。

「合点です。それじゃ、定例通りに」

「はいはい。商談入れてあるんで、エントルまで出ますわ」

「夕刻までには終わりますんで……あつ。すぐ車退かします」

わたわたと動き始めた男二人を見、結局挨拶らしいことをせずに終わってしまったことを、カラスは僅かばかり気にかけて不貞腐れる。

事前に段取りを決めていた通り、用事を済ませるため車に乗り込もうとするムロビシに、ふとトイトが調子を戻して問いかけた。

「車……やばくないですか？ ボンネットひしや拉げてますけど」

「ちよつとやらかしてね。昨日はちゃんと走ってたし、今日分くらいは働いてくれるでしょ」

「年代物はタフですなえ」

「俺もあやか肖りたいよ」

しげしげと半壊状態の車体を眺めて、何故か楽しそうに話す二人が、それぞれの車に乗り込み、慣れたハンドル捌きで位置を移動させる。その一連の展開を残された三人が無言で眺める構図が短時間流れたが、不意にラヤンがカラスたちを向くと、その鋭い相貌を順に運んで光らせる。

「なんだよ」

彼女の人となりを知る機会は無ロビシとの応酬でしか得られていない現状だが、カラスは相変わらず即行噺ける。双方が穏やかな人物ではないことを悟っているキナリにとっては、まだ少しの間、肝を冷やす時間が続くらしい。

投げられた煽動を拾うつもりがあるのかなのか、ラヤンが間も狭く口を開く。

「中に入れ、ガキ共」

「——はア？」

呼吸を感じさせない、独特の間を経て放たれたそれは、キナリが懸念していた場荒れよりも遙かに突拍子がなく、過激なものであった。当然、直情的なカラスが粗暴な言葉遣いに食つてかかるのだが、ラヤンが怯むことはない。

「家主の不在により、お前等の管轄はボクたちへ移行された」

「だアから！ テメエもおっさんも説明ハシヨリ過ぎなんだよ！ 分かるように話せ！」

いつの日か振りの懐かしいやり取りの再現が、性懲りもなく繰り広げられる。キナリからし

てみれば、随分と遠い昔の回顧に耽る気分だ。無論、初顔合わせのラヤンには不快な雑言でしかない。

「……騒がしいぞ、クソガキ」

「黙れ、イカレ頭。オレは指図されんのが死ぬほど嫌いなんだよ」

右へ、左へ。カラスの重心が僅かに揺れる。アカアリのとの組み手に挑む際によく見せる、踏み込む直前の彼の癖。毎日一緒に生活するキナリには見慣れた動作だった。殴りかかる気なだろう。自身の非力を誰よりも自覚しているキナリは、せめて呼び止めなくてはならないと判断し、息を吸い込もうとするのと、ほぼ同時。

「説明求めておいて『黙れ』かよ——」

舌を打ちながら、ラヤンが姿勢をぐんと低く取った。カラスの出方に気づいている様子で、何かしらしようと企てているようだ。

相手が迎え撃つ態勢に入ると、尚火がつくのがカラスという生き物だ。こうなつてしまうと、名を呼んだ程度では何の抑止力にも成り得やしない。カラスの服の裾を引っ張ろうと腕を伸ばした瞬間、視界の端から暗転し、体の末端から一切の力が抜け落ちる。

眩暈——とかいう、体の不調の特徴に似ている。地面すらすり抜け、無限に沈んでいくような感覚に襲われるが、視力がすぐに回復したのを察知して顔を上げる。しかし、その先にあつたのは、見たこともない暗い壁。すぐ傍にいたはずのカラスとラヤンの姿も、視界には捕らえ

られない。体の沈下は止まらず、どこものとも知れない壁が急激に遠ざかっていく。

ここまで来てようやく、どうやら自分は仰向けになっていて、壁だと思い込んでいた物は天井であるらしいことを認知した。

つまり、このままでいれば、かなりの高さから、床に落ち、背中を打ち、大変な怪我を、負うのでは——？

惨劇を予測する思考がコマ送りで噴出する中、ぎゅつと目を閉じると、ガラガラという崩落音が耳を劈く。

痛みはない。ずっと感じていた落下の感覚も消えた。得体の知れない恐怖を胸にしながらそつと目を開くと……力一杯伸ばした腕の先で、カラスが半月を描いて宙を舞っていた。

元の世界に戻ってきた。そう歓喜した瞬間に汗が噴き出し、カラスが背中から床に叩きつけられ、部屋の隅に積み上がる車の金属部品が飛び散って騒音を立てる。カラスの口から軋むような苦悶の息が漏れると、直にガレージはしんとした沈黙に支配された。

「情緒沸きすぎだろ、単細胞が」

つかんでいたカラスの腕を放り投げるように離して、ラヤンは立姿を取り直す。

「半不死身の新人類を相手取るのに、丸腰の研究者だけでこんなところ来るワケないだろ。ちよつとは思慮しろ、バーカ」

緩んだ首元の布切れを直しながら放たれるラヤンの罵詈は、痛みに悶絶するカラスに届くは

ずもなかった。

最新ココカラ

キナリが身に覚えのない空想に動転しているうち、一方のカラスはいとも容易く負かされたようだ。ラヤンの出で立ちにさほど変化が見られないのがその証拠だろう。息も上がらず、怪我どころか汚れもせず。多少の高揚感だけは湧くのか、険しいままのラヤンの表情に、心なしか色彩が宿っているように見える。

「おい。そつちの根暗」

そんなことを考えながら状況整理を急ぐキナリへ、ラヤンが声を掛ける。

根暗。凶暴なほど実直な呼称に、キナリの顔は自然と強ばる。カラスは分かりやすく打ちのめされたが、はてさて、自分はどんな仕打ちを受けるのだろうかとかと、被害妄想は止まることを知らず広がっていく。石像のように動かない少女を見、ラヤンは何か言い掛けた口を閉じると、興奮めといった様子で視線を伏せた。痛み^もに身を振るカラスを見ているように見受けられる。まるで嵐の前の静けさのようで、逆にキナリの不安を煽る沈黙が下りる。

何かしらに対して不満なのだろう。ラヤンは僅かに口を尖らすと、先程までの殺気立った語

調とは似ても似つかぬ小さな声で、つぶやく。

「……^{データーフル}星霜匣まで来い」

ムロビシと相対したときと同じく、ぼそぼそと聞き取りづらい。キナリの返事を待つこともせず、ガレージから建物内に入ることのできるドアを勢いよく開けて、サツシュに右足を掛け、俯き加減の視線を動かすこともなく言葉を補う。

「初見からずつと顔色が悪い。何も問診を立つたままやる必要はない。そこで伸びてるガキとつとと連れて来い」

やはり早い語調でそう言い捨てる、ラヤンはドアをくぐつて姿を隠した。

確かに、ラヤンに見破られた通り、先程の奇妙な出来事も含めて気分は優れない。気分が悪い理由はそれだけではない。

昨日からずつと頭から離れないケエのこと。それについてラヤンとトイトから聞き出す暇があるのだろうかと気を張っていたこと——。自分の顔色までは把握できていないが、他人に言い当てられるのなら相当顔に出ているのだろうか、とキナリは思う。

しかし、他人の不調を察して、気遣いを窺わせながら場所を変えるところを見るに、ラヤンは意外と話の通じる人間かも知れない。未だ人物像が不明瞭であることに変わりはないが、不安要素が少しばかり解消されただけで、キナリの緊張感は大きく和らいだ。ほう、と息をつく頃になって、呻きながら身動いだカラスに声を掛ける。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃねーよ……見りや分かんだろ……」

力んだ両手で顔を覆い、落ち着かないようにその手で額や頬を強く擦りながらの返答。まだ痛みが抜けきらないのだろうか。いつものようにキナリの言葉を無頓着と誤認して怒るにしては、あまりにも覇気がない。

なんとか身を振って俯せの姿勢を取り、肘を床に突いて、鼻先を地面すれすれまで近づける。長さのある前髪が邪魔をして、キナリからはカラスのその表情を覗くことはできない。

「どいつもこいつも強えな……」

気に食わない。悔しさが色濃く滲むカラスの小さな独り言の最後に、口には出していないそんな一言が聞こえた気がした。

「なあ」

「うん」

普段より幾分低い声で呼び掛けられたキナリは、これまでに何度も繰り返してきた短い相槌を打つ。カラスは少し顔を上げ、続ける。

「あのトイトってヤツの手、なんかついてたりしたか？」

「……何もなかったと思うけど」

「オレの顔を、こう、グワツと掴もうとしたりは？」

「してない」

「だよな……」

何を気にかけてそんなことを聞くのだろうかと思いつながらも素直に答えると、それを受けたカラスも、首を傾げてから起き上がり、あぐらを掻いて座り込む。

「そういう風にされそうになった……気がしたんだよな」

「トイトは普通にしてた」

「だアから分かつてるって！」

「カラスの勘違いじゃ——」

勘違いを放っておくと後々になって厄介事を起こす可能性もある。今のうちに訂正できるところはしておこうとしたキナリは、そこまで口に出したところでハツとした。

「さつき、わたしも……！」

何事かを説明しづらそうにしているカラスの口振りから、つい先程の奇妙な体験を思い出した。カラスの目の前にしやがみ込んで、目を合わす。珍しく声を張るキナリにぎよつとしたカラスが僅かに仰け反ると、後頭部に何か当たる。こんな間近に何も置いてなかったはず。鋭敏に振り返ると、長身の男がにっこりして二人を見下ろしていた。

「何の話ですか？」

トイトだった。車を退かすと言ったきりなかなか戻ってこなかったもので、とんだ不意打ちに

二人は硬直する。その様子がおもしろいのか、口角を緩く上げて、笑う。

「ふふ。内緒話くらいするよね」

「……教えろってか？」

「いや、強要はしないでしょ。紳士的でしょう？」

冗談を言つて、カラスの頭を右手でぼんぼんと二度、軽く叩くようにする。一瞬攻撃かと身構えたカラスだったが、どうやらそういった類の目的の行為ではないと気づくと、それでも口を曲げ、歯を見せて不服を表した。トイトはカラスの感情表現に構うことなく、話を変える。

「それよりラヤンはどこかな？ 遠目にカラスくんと遊んでいたのは見えたんだけど」

「あれが遊んで見えたのかよ」

「ふふ。最近はラヤンも運動不足で気が立ってたから、ずいぶん楽しそうでした」

「どういう生活してんだよ、テメエら」

「俺たちも、あまり野外に出られないもので」

君たちと一緒にだね、とトイトは自嘲する。

「たぶん星霜匣の部屋にいる」

「おお。ありがとう」

トイトは少し腰を屈めると、礼を述べつつ、キナリに對しても頭をぼんぼんと叩く。一切の力を込めていないのだろうが、体格の差からか、キナリの細い首にはそれなりの負荷がかかる。

とはいえ、トイトのその行動は何となく気分の良くなるものであった。

上体を元に戻し、改めてガレージを一瞥。キナリから教わった通りラヤンが待つと思われる星霜匣へ向かうため、白衣を靡なびかせながら、ガレージの出入り口に足をかける。

「二人も、ラヤンに呼ばれたのなら早めに行つた方がいいと思うよ。あの子、見て分かる通り、ものすごく利己主義で短気なんだ」

先に行くからね、と手を振ると、トイトは廊下を歩いて行つた。

トイトの放つ茫々ぼうぼうとした空気感に中てられた二人は、数秒の間、言葉を交わすこともなくぽかんとその場に居座つた。

「——で、キナリも変なもん見たのか？」

「あ……うん」

カラスが立ち上がりながらキナリに話の続きを促す。

「……カラスがラヤンに飛びかかるの止めようとしたとき。知らない部屋の高いところから、背中を下にして落ちてた……気がした」

「なんだそれ。さっきの出来事関係ねーじゃん」

「そう思った。けど……景色が元に戻つたとき、ちょうどカラスがラヤンに投げられて、背中打つてた」

「予知かよ」

「ちよつと違ふと思うけど……」

カラスの放つた『予知』という言葉で、さらに思い出す出来事があった。

「——そういえば、キャレーで最初にアカアリと遭つたときも同じようなことあつた」

「すげー前の話だな……」

気味悪そうな表情のカラスに、こくりと頷く。

「やっぱり、カラスを止めようとしたときだったと思う。あのときは何かが見えたんじゃないかと、なんとなく、カラスがアカアリに負けるのが分かつた感じ」

「……その場ですぐ言えよ」

「言おうとしても聞かなかつた」

ぴしやりと言ひ切るキナリにむつとして、カラスはラヤンやトイトと同じ経路を歩き出す。機嫌を損ねたのは、アカアリに負けた過去を思い出したからなのか、はたまた素行をキナリに注意されたからなのか。いずれにせよカラスにとつて都合のいい話ではない。未だ廊下に佇むアカアリを警戒しながら通過して、早々にこの話題を終わらせようと、後をついてくるキナリに向けて言う。

「まあ、キナリも同じような経験あんなら、オレだけがおかしくなつちまつたワケじゃねーな」
「……どつちもおかしくなつてるのかも」

またいつもの「うん」が返ってくると思つていた。しかし実際は、カラスの考えていたよう

な気軽な相槌はなく、厭いやに気にかかる含みをもった言葉が二人の間に落ちた。歩みを止め、眉を顰ひそめて振り返るカラスに、キナリは黙って、緩やかに首を振る。

「——ラヤン、怒らすとめんどくさそう。早く行こう」

話を逸らすには勢いの足りない提案を無視して、カラスはキナリへ一言突きつける。

「オレになんか隠してんのか？」

余計な気遣いのない疑念だった。

普段、他人の言葉に耳を傾けることをほとんどしないというのに、言葉少ななキナリの機微を見逃さない嫌いがある。鋭く飛んできた疑問に緊張を感じながらも、よもや誤魔化しが通るとも思えないキナリは、素直に頷いてみせた。

「……隠してる。でも、まだ話したくない」

「——あつそ」

僅かに目を細めたカラスが、さも興味もなさげに吐き捨て、再び歩き出す。怒りを露わに食いや下がるのではと構えていただけに、キナリは素っ頓狂な表情を浮かべてしまう。

時折、カラスの感情の起伏が読み取れないことがあると、キナリは廊下を歩きながら考える。彼もまた、何か隠している考えがあるのだろうか。驚くほど単純な思考で相手に襲いかかるときもあれば、ほんの些細な変化に気づいては相手を問い詰めるときもある。何も考えていないように、実はそうでもないのか？ そんな想像を膨らませて、しかし、ほぼありはしないだろ

うと決めつけて、キナリは思慮断念の息をついた。

いずれにしてせよ、互いの腹の底をおおつぴらにするタイミングは今ではないだろう。とにかく、キナリにはまだ、ケエから教わった廻人ねどの事実についてカラスに明かす勇気がない。もし可能ならば、ラヤンとトイトから直接話してもらった方が情報は正確なのではないかと、そう期待しているせいでもある。カラスも、二重構造の頑丈なシャツターが開放されたままのガレージから抜け出すこともせず、来訪者である二人の待つ星霜匣を指している時点で、対話に臨むつもりでいるようだ。

無言の少年少女は、自室でもある星霜匣の設置された部屋に辿り着く。ずいぶんと待たせることとなったが、ラヤンとトイトはいるだろうか。

恐る恐る部屋を覗き込むと……すでに睨みを利かせていたラヤンと、思い切り目が合った。その両手は、星霜匣の周囲に設置されている大きな機械の側面に添えられており、中腰のまま股割りという斬新な体勢である。一方のトイトは、ラヤンの隣で工具を持って笑っている。

「遅いッ!!」

凄まじい怒気が風になって届かん勢いの喝が少年少女を強襲する。

「何分くつちやべってやがる!! お前等には時間の概念がないのか? これだからボクはガキも新人類も子供も嫌いなんだよ!」

「ガキと子供は一緒だと思うなあ」

「黙れ！」

口を挟んだトイトへ怒りの矛先が向く。

「大体どうして、トイトも後から来たっていうのにガキ共を連れてこなかった?! おい、ヘラヘラしてないで話を聞きながら手を動かせ、トイト!!」

「はいはい」

「一度に二度返事をするなって普段から言ってるだろ!!」

「ふふ。一粒で二度おいしい、みたいだ。いや、違うか」

完全にとぼつちりを受けることになってしまったトイトだが、ラヤンの憤怒を全く真に受けることなく、訳の分からない独り言を口走りながら緩慢に作業に取りかかる。